

氏名	玉川和隆 たまがわかずたか
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第492号
学位授与の日付	昭和47年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	歯周組織の構造異常に関する研究

(主査)
論文調査委員 教授 美濃口 玄 教授 岡本耕造 教授 西村秀雄

論文内容の要旨

歯牙歯頸部に於けるセメント質とエナメル質の境界，すなわち，歯頸線は，単純な曲線から非常に複雑な彎曲を示すもの，さらにエナメル質が大小の島状に歯根表面に存在するものがある。とくに前歯部隣接面，大白歯頰面，及び根分岐部に於けるエナメル質セメント質の境界は複雑な形態を示すものが多いと言われており，また歯根象牙質表面に異所性に存在するエナメル真珠，エナメル滴の部分にはセメント質は欠如，ないし異常形態をとることが明らかにされている。

セメント質の形態異常は，歯根膜組織を介して歯牙と歯肉との接合様式を変え，歯根膜組織の構造異常をもたらし，ひいては歯牙の固定にも影響を及ぼすであろう。従って歯根部セメント質の形態学的特異性を知ることは，歯牙の固定破綻を主症状とする歯周疾病発生の素因をうかがううえにおいても重要と考えられるので，歯周組織の附着した歯牙について，エナメル質セメント質境，及びセメント質を中心とする形態異常について組織学的検討を行なった。

京都大学医学部解剖学教室保存の屍体，及び口腔外科学教室にて手術に際して摘出した顎，又は歯周組織の附着した歯牙182歯を脱灰連続切片標本となし，ヘマトキシリンエオジン染色，チオニンピクリン酸染色の下に，セメント質の異常形態，歯根膜内石灰変性などについて観察を行ない次の様な結果をえた。

- 1) セメント質の構造異常は根部セメント質の歯頸部近くに見られ，歯根膜内に異常セメント質の発生が見られた。
- 2) 歯頸部に認められるセメント質異常は歯根象牙質表面に存在するエナメル質部に多く，エナメル質の存在のためにセメント質欠如の見られるものがあつた。他方エナメル質を被覆するセメント質に彎曲肥厚が認められるものもあつた。
- 3) 根部象牙質に存在するエナメル質によるセメント質欠如部では，この部のエナメル質形成にあつた上皮附着が延びてエナメル質と連絡しており，この延びた上皮附着は根部エナメル質よりに存在するセメント質をも被っているため，上皮附着の最低部までは歯牙と歯肉との間の歯根膜線維による

結合は認められなかった。

- 4) 象牙質表面のエナメル質の被覆セメント質には著明なセメント質肥厚がみられ、所謂セメント質瘤を形成していた。このセメント質瘤の内部には円形、不正円形の変性巢の散在が認められた。
- 5) セメント質瘤に近い歯根膜組織内にはその成立過程、構造の点からエナメル質を形成完了した Malassez の上皮遺残の変性像と考えられる石灰変性、空胞変性を示す円形、不正円形の変性巢が見られた。
- 6) 歯根膜組織内に散在性に又集簇性に見られる石灰変性を中心にして歯根膜組織の石灰変性がおこり、その組織構造はセメント質に類似していた。この様な変性巢では歯根膜線維の走行、配列に不正、断裂がみられた。
- 7) 一方エナメル質の存在とは無関係に歯根膜組織内に変性した Malassez の上皮遺残がみられ、その一部は不正円形の石灰化巢に変化していた。

以上の結果から、歯牙支持組織とくに歯牙歯肉接合部、すなわち歯頸部附近におけるエナメル質、セメント質及び歯根膜の異常構造が高い頻度で観察され、その発現部位は前歯隣接面、大白歯頰面に多かった。一方この部に歯周組織疾患の発生し易いと言う臨床的事実がある。これらのことから歯周組織疾患の発生に歯牙支持組織の形態学的特異性が、疾病素因として或る程度の役割を演じているのではないかと考えられた。

論文審査の結果の要旨

セメント質の形態異常は歯牙と歯肉との接合様式を変え、歯根膜組織の構造異常をもたらし、歯牙の固定破綻を主症状とする歯周疾患発症の素因をうかがう上に重要と思われるので、屍体、手術時に摘出した顎、及び歯周組織の附着した歯牙 182 歯を用いて得られた脱灰連続切片標本について、エナメル質、セメント質境、及びセメント質を中心とする形態異常について検討した。

セメント質の構造異常は根部セメント質の歯頸部近くに見られ、歯根象牙質表面に存在するエナメル質部に多く、エナメル質の存在のためにセメント質欠如の見られるものがあつた。セメント質欠如部ではこの部のセメント質形成にあつた上皮附着が延びてエナメル質と連絡しており、上皮附着の最低部までは歯根膜線維による歯牙と歯肉との結合は認められなかった。その他セメント質瘤の形成 Malassez の上皮遺残の変性像、歯根膜組織の石灰変性等があり、それらの発現部位は前歯隣接面、大白歯頰面に多く、歯周組織疾患の発症に歯牙支持組織の形態学的特異性が素因として或る程度の役割を演じているのではないかと考える論拠を得た。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。